



---

# 語学者の散歩道

---

柳沼垂直

---

### 〈著 者 紹 介〉

柳沼重剛(やぎぬま・しげたけ)

1926 年東京生まれ。京都大学文学部卒。  
1950 年東京都立九段高等学校教諭, 1956 年京都大学助手, 以後立命館大学, 東海大学を経て筑波大学教授。現在同大学名誉教授。専攻は西洋古典学(とくに古代ギリシア散文の文体)。

著書に、『古代知識人群像』(東海大学出版会), また訳書に, ソポクレス『アンティゴネー』(『ギリシア悲劇全集 2』岩波書店), プルタルコス『似て非なる友について』ほか 3 点(岩波文庫), G. ハイエット『西洋文学における古典の伝統』(筑摩叢書)などがある。



KENKYUSHA

〈検印省略〉

## 語 学 者 の 散 歩 道

1991 年 10 月 18 日 初 版 発 行

著 者 柳 沼 重 剛  
発 行 者 石 川 雅 信  
印 刷 所 研究社印刷株式会社

発 行 所 研究社出版株式会社

〒 102  
東京都千代田区富士見 2-11-3  
(編集) 03 (3288) 7755 (代)  
電話 (販売) 03 (3269) 4333 (代)  
振替口座 東京 7-83761 番

ISBN 4-327-45086-3 C1095

装 幀 矢 吹 勝 博

語学者の散歩道

目次

# 目次

## I

|                       |    |
|-----------------------|----|
| はじめに                  | 1  |
| ‘It’s Greek to me’ 考  | 16 |
| R は犬の字                | 29 |
| 賽は投げられたか              | 42 |
| 田舎のねずみと町のねずみ          | 55 |
| 大山鳴動してねずみ一匹           | 70 |
| Homer sometimes nods. | 80 |
| 健全な肉体に健全な精神           | 86 |

II

|                         |     |
|-------------------------|-----|
| クセノポンの『アナバシス』           | 102 |
| イソップなどを読んで文楽や志ん生を思い出すこと | 109 |
| ヒストリアはいつから歴史になったか       | 119 |
| ミトリダテス                  | 132 |
| きわめて異色な本のこと             | 149 |
| 探偵アリストテレス               | 159 |
| ロバート・グレイヴズの歴史小説         | 170 |

III

|        |     |
|--------|-----|
| シクラメン  | 180 |
| 棺のこと   | 187 |
| 役者・偽善者 | 196 |
| 白鳥の歌   | 199 |
| Climax | 202 |

|              |     |
|--------------|-----|
| ピリオド、コロン、コンマ | 206 |
|--------------|-----|

#### IV

|                             |     |
|-----------------------------|-----|
| ギリシア語・ラテン語を学んで日本語を考える       | 212 |
| 語学の練習問題の楽しみかた               | 224 |
| ある英語の試験問題のこと                | 237 |
| まったく知らない事柄について書かれた英語        | 243 |
| 私の 'fresh' 体験               | 246 |
| はじめて暮らした英国で驚いたこと            | 250 |
| 一万年後の東京大学あるいはポケット・ティッシュについて | 260 |
| 河野與一先生のこと                   | 265 |
| あとがき                        | 269 |

## はじめに

以下にお目にかける雑文のかずかず、まとめて題して「語学者の散歩道」という。散歩だからどこへでも行く。しかしどこへでも行くといっても、散歩だから遠くへは行かない。気のむくままに近くを歩きまわるだけである。前人未踏の地とか危険な場所とかへ出かけて冒険することは絶対にない。しかし、自分がよく知っている所でも、歩いてみると「おや」と発見をすることがある。以下にお目にかけるのは、散歩の途中でそういうように「おや」と気になったことを書きとどめたものだと考えて下さってよい。「おや」と思った程度のことしか書いてないと思って下さってもよい。学生の頃、散歩する人に二つの型があつて、一つは静かな所を求めて町を離れるタイプ、もう一つはことさらに賑やかさを求めて町へ出るタイプだと聞いたことがあるが、私はこのいずれでもない。というよりいずれでもある。静かな所を歩く方が好きだが、それでいて行き着く所は町がよい。そこにいい本屋さんがあつて、そのうえコーヒー屋でも見つかれば理想的である。今もコーヒーカップを片手にこれを書いているつもりで、だから読んで下さる方もコーヒーでも飲みながら読んで下さるなら光栄だと思う。

「語学者」というのは私自身のことだが、私にとって専門は西洋古典文学、つまり西洋文学の母胎をなしている古代ギリシア・ローマの文学、もっと詳しく言えば古代ギリシアの散文の文体を研究しているつもりで、したがって、専門家としての私にいちばん縁が深いのは古典ギリシア語だが、西洋古典文学をやっていますと看板を出す以上ラテン語も読めないと相手にされないのでラテン語もやることになり、近代語では英語、それに旧制高校でドイツ語を第一外国語とするクラスに入ったのでドイツ語、それから京都大学に入学した時先生から、「文学部に入った以上英・独・仏の三か国語ぐらい読めなくっちゃあ」とあっさり言われたので、大いにあわてて、これは完全に自学自習でフランス語をやり、それからさらに留学したイギリスで、これも先生からイタリア語の研究書を渡されて、これをこの次までに読んできたまえと言われた時に、「実はイタリア語は読めないのです」と白状したら、「ラテン語をやっておいてイタリア語をやらんとは何たることだ——今でも覚えている、先生はその時私にむかって『What a shame!』とおっしゃったのだ——すぐやりたまえ。二週間もあれば十分だ」。そこで二週間の速成で身につけた程度のイタリア語、こんなところが私にとつての外国語である。だから私は語学者だろうと思う。

古典文学を研究するのに、私はこういう外国語のお世話になっているのだが、古典文学以外で私ごとくに親しんでいるのは英語とイギリスの文学である。その場合、古典文学は専門だから論文を書かねばならないが、イギリスの文学は私にとつては純粋に楽しんでいけばすむので、気楽に接す

ることができるという区別はある（しかしおかげで、文学を研究するとは文学にどう接することだろうかという切実な問いをもつことができるようになった。つまり研究などしない方が純粹に文学を楽しむことができると思えるからである）が、こうなったについてはいくつか理由がある。

まず学生の頃アルバイトとして、当時のアメリカの進駐軍の将校のハウス・ボーイをやった（一九四六―七年）。私がついた将校はすでに故人となられたが、R・R・ボイヤーさんという、階級は中佐で Inspector General という職にある方だった。しかしこの方のおつき合いが私にとってとくに幸運だったのは、とにかく語学の好きな方だったということで、勤務時間後英語と日本語の交換教授をしたのが忘れられない思い出である。日本語で九つめのことばになる、是非覚えたいと言われた（それまでに英・独・仏・伊・露・スペイン語・ギリシア語・トルコ語を読み書き話すことができるようになっていたのだ）。お父さんがドイツ人お母さんがイギリス人で、奥さんはギリシア人だと伺った。「じゃあ、あなたのお子さんはなに人ですか」と聞いたら、「アメリカ人さ」と笑われたのを覚えている。しかしこの方のおつき合いが、私にとっては生まれてはじめての英会話の体験で、はじめての体験をしたのがこういう方をお相手にしてだったのは、実に恵まれていたと思う。とにかくこれで英語に対する親しみがいっぺんに沸いた。

次に高等学校で英語の教師を七年間（一九四九―五六年）やったこと。今から思えばむちゃな話だが、とにかく私は英語の二級免許証をもっていた。英文科出身でもない私がなぜそんなものをもつ

ているかという、これが旧制高校卒業の有難さで、卒業証明書と成績証明書を出しさえすれば二級免許証がもらえたのである。ただしその成績証明書なるものを見て驚いたのは（在学中も卒業後も、自分の成績を見たのはそれがはじめてだった）、私の英語の成績は、高等学校在学期間を通じてただの一度の例外もなく、みごとに揃って「可」（今ならC）だったということで、我ながらこれはひどいと思った。だからこれを教頭先生に見せて、「こんなんですけど、これでもよろしいでしょうか」と顔を赤らめながら申し上げたら、「ああ、ああ、立派です。立派じゃありませんか、これだけきちんと揃っているのは、「不可」がなけりやいいんです」と言われて、いっそう顔がほてる思いがした。しかしそれからしばらくすると、教育委員会からちゃんと免許証を送付してきた。

次に京都大学の助手をしている時に（一九五六一一年）ロジャー・マシューズ氏と知り合った。知り合うきっかけを作って下さったのは、当時文学部長だった中国文学の吉川幸次郎先生である。「あなたはたしか英国に留学を希望なさってるんですよね。今ちやうど私の部屋にケンブリッジから若い英国の方が赴任して挨拶に見えてるんですがね、よかつたらすぐここへ来ませんか」と私の部屋に電話を下さったのである。このマシューズ氏とはその後もずっと友人でありつづけて今に至っている。彼はたいへんに知的であるうえにユーモアがあふれ、駄洒落の名手だが、それより何より、私の直接の恩師である松平千秋先生もこのマシューズ氏がたいへん気に入られて、とうとう

われわれの学会誌の英文レジュメの英語を、彼に校閲してもらうことになったのが最大の恩恵だった。これを彼は実にいいねいにやってくれたので、私にとってはほかではできない勉強になった。彼が英語を直しながら、「こう直しても著者が言わんとしていることがちゃんと伝わると思うか、それともずれてしまうと思うか」と、きめ細かくいちいちこっちに質問しながら、「それじゃあこうするか、それともこう書いた方がいいと思うか」と念を押して英文を仕上げていくのである。——こうして私は論文調の英語を彼から学び、彼とのつき合いが深まるにつれ、イギリスおよびイギリス文学への親しみが募ってきた。

時間の順序に従えば、次は私が結婚して、その妻が英文科出身だったということになる。しかしそれより数年前、松平先生がブリティッシュ・カウンシルの留学生としてイギリスへ行かれ、私も強くこの留学生の試験を受けることを勧めて下さり、そこへマシューズ氏も応援というよりはおりたてで、それで私もブリティッシュ・カウンシルの留学生として、行った先はスコットランドのセント・アンドルーズだった。そしてそれはそれで私にはたくさんの幸せな思い出があるが、同行したくてもできなかった妻のために英国と英文学に関する情報をせせと書き送ろうと、私なりに努力したと思う。

帰国後、京都大学の助手を辞して立命館大学で英語を教えることになった時、さすがに私は自分が素人であると自覚しないわけにはいかず、それで多少まとまったイギリスやイギリスの文学の勉強

強もした。しかしどうせやるならと、古典文学とのかかわりにおけるイギリス文学を見ようという気になった。それと前後して、ブリティッシュ・カウンシルの京都分館長として赴任してきたピーター・マーティン氏と知り合う幸せを得た。のちに田中美知太郎先生の論文を海外の学術誌に掲載することになって、そのための英訳を私がお引き受けした時、その英語をチェックしてくれたのがこのマーティン氏である。氏は多忙な公務の合間を縫って、先のマシューズ氏と同じことを同じようにきめ細かくやってくれた。おかげさまでマーティン氏とのつき合いは今でもつづいている。ついでながら、このマーティン氏が先年ブリティッシュ・カウンシルを退き、いわゆる「full-time writer」としてジェームズ・メルヴィルのペンネームでミステリを書き始めた時、それを日本語に訳したのは田中先生の御子息の昌太郎氏である。

こうして私は門外漢ながらイギリスおよびイギリス文学とだいぶ親しむことになったのだが、さらにもう一つわけがある。それは探偵小説とのつき合いである。もともと探偵小説（という言いかたの方が私にはびったりする。ミステリというのはどうもぴんと来ない）が好きだった私は、高等学校の教師の時にシャーロック・ホームズを副読本として使ったりしていたが、決定的にのめり込むようになったのは京都大学の助手になってから、松平先生がペンギン・ブックの緑版でイギリスの探偵小説をいろいろお持ちで、これがおもしろいぜなどとお薦め下さったからである。そこで松平先生のペンギン・ブックを片端から読んでいくうちにいよいよ足が抜けなくなった。そのう

え、高校の教師をやっていた時、同時に旧制の東京大学の大学院に籍をおいて、指導教官をお願いしたのが高津春繁先生なのだが、この高津先生がまたたいへんな探偵小説ファンで、なにしろ京都へ行くと英語の探偵小説が片道に一冊ずつ要るからねという先生で、ある時大岡昇平が高津宅に現れて、読んでばかりいないであなた自身もお書きなさいと言ったと、半分嬉しそうな、半分迷惑そうな顔をして先生が言われたのを覚えている。——こうして私は探偵小説を通して、またイギリスや英語に浸り込むことになった。それに英国の探偵小説の作家には、ドロシー・セヤーズ、ニコラス・ブレイク、マイクル・イネスというような、本業は文人・文学者だという人が多く、またそうでなくても、イギリスものには「literary allusion」が豊富で楽しめるのも、私が浸り込むことになった大きな理由である。しかしまた「literary allusion」など全然なくても、例えばクロフツの探偵小説のように、ねばり強いだけが取柄のような警部が登場して、ごく小さな、平凡な事実を積み重ねていくと、こうしか考えられないという結論に達して大事件の解決に至るなどというのを見ると、これは古典学で「evidence」（文献証拠）を重ねて文献学的に論を形成するのと似ているではないかと思えたことの方が、もっと大きな理由だったかもしれない。

立命館大学当時、イギリス文学に触れはじめていちばん関心をひいたのはポウプの『イリアド』である。とくに、彼が翻訳の前に付けたホメロス翻訳論と言える論説で言っていることは、ホメロス（英語読みではホーマー）翻訳論としてはほぼ正しいと思えるのに、実際の彼の翻訳が少しもホメロスらしくないのが大きな驚きで、これはまじめに考えるに値すると思った。ポウプは言う、ホメロスの翻訳の文体は *natural* で *plain* で *swift* でなければならぬ。これはまさにその通りで、この三つのどれが欠けてもホメロスではなくなってしまうと思う。ところが私の印象では、ポウプのホメロスは *natural* でなく *plain* でなく、*swift* ではあるがその速さはホメロスの速さとは異質のものであった。つまり *natural* で *plain* であることを志した人の作品が *natural* でも *plain* でもないということ、しかしポウプほどの詩人には、*natural* たらんと欲して *natural* たり得なかったということとはまずあり得ないだろうから、これはポウプにとつての *natural* や *plain* の概念と、われわれが理解している *natural* や *plain* という概念の間に何かずれがあるにちがいないと思えた。

とはいえ、英文学が専門の方ならばこの程度のことはとうにご存じで、これについて論じた文献もいろいろあるにちがいないと、大学の書庫をあさっているうちに——今やこの書庫あさりの楽しみはコンピュータに奪われてしまった。コンピュータのおかげで非常に効率よく、無駄な時間をかけずに欲しいものが見つかるようになった。しかし無駄がなくなったので、「あ、あった」という喜びをはじめ、人文の学にとっては大事なものもなくなったと思う——マシュー・アーノルド

に『ホーマー翻訳について』という長大なエッセイがあることを知って、読んでみると、わが意を得たりという感じの文章だった中に、ホメロスの翻訳は Heroic Couplet も駄目だが Blank Verse も駄目で、なぜなら Blank Verse だとイギリス人の耳にはシェイクスピアやミルトンが響いてホメロスには届かないから、という言葉があり、ある韻律を選ぶということは語彙をも決めてしまうことになると言っているのも印象にのこった（そう言われれば、歌舞伎でも、せりふばかりか所作まで、七五調というリズムと不可分だと感じた）。しかしアーノルドがつづけて、ホメロスは Hexameter なのだから英訳も Hexameter であるべきだと言い、例えばこんな具合だと自分の試訳を示しているのだが、これがとても Hexameter とは思えない妙なもので、アーノルドほどの詩人でもこんなものを書くのかとびっくりすると同時に、そもそも英語には Hexameter など無理ではないのかと、一足飛びに断定しているのをどう考えるんだ」と言われて、どうも俺は勇ましすぎたようだとエロウがそれで成功しているのをどう考えるんだ」と言われて、どうも俺は勇ましすぎたようだと反省したが、正直なところこれは今なお謎である。

マシューズ氏とだべっているうちに、キーツの『はじめてチャプマンのホーマーを読んで』が話題になり、キーツがチャプマンのホーマーに感動していることを知ったが、そのチャプマンのホーマーは、ポウプのようにラテン的でない代わりに、テンポの速さがないと感じた。またポウプよりは natural だが、やはり plain ではないと感じた。キーツは誰かに宛てた手紙の中で、ポウプのホ

「マーはまったく駄目だと言っているようで、それならキーツはなぜ、チャプマンをあれほどすばらしいと思ったのか、なぜポウプはまったく駄目だと思ったのかが気にはなったがそのままにしているのは、素人の気楽さである。」

こうして、マシューズ氏を、まことに失礼ながら手近で便利なガイドとして勝手に利用させていた。ただきながら、イギリスの詩文をつづいていくうちに、T・S・エリオットの詩劇や詩論へ走ったり、またそれがきっかけとなって、とうとう木下順二・福田恆存両氏のシェイクスピア翻訳に関する論争などというところまでたどり着いた。ここまで来ると、これは古典学者としてはたぶん寄り道というほかないことになるだろうが、しかし、負け惜しみでなく、この寄り道はまったく無駄だったとは言えないだろうと今では思っている。なぜなら、ギリシア悲劇に接してもアリストテレスの『詩学』を読んでも、今言ったようないろいろな人の発言を思い起こしながら読むくせがついたのは、むしろいいことだしか思えないからである。

\*

それにしても日本人がギリシアの古典をやりますなどと言うと、イギリスでは多くの人から不思議がられたのも事実で、中には、例えばアイスキュロスの悲劇の合唱など日本語には翻訳不能だろ